

Ending Book

**この本はエンディングブックです
指示があるまで読んではいけません**

エンディング 1（アカが単独で最多票）

- ※ エンディングは色がついているキャラクターのセリフを担当した人が読んでください。
それ以外の場所は GM が読みます。
- ※ セリフは、大体の内容が合っていれば、口調などは自由に変えていただいて構いません。

みんなに追い詰められたアカは、ヤケクソ気味に叫びました。

アカ：「そうだよ、冷蔵庫のプリンを食べ、代わりにクッキーを入れたのは私だよ！でも、私以外にもみんな失敗したりお菓子食べたりしてるじゃない！あのプリン、不味すぎて体調崩しちゃったし！」

それを聞いた咲夜さんが、「ほう。詳しく聞かせてもらいましょうか？」と言って4人を見渡しました。咲夜さんの冷たい視線に、アカはブルッと身悶えしました。他の3人も耐えられず、次々に本当のことを白状してしまいました。

ムラサキ：「レミリアお嬢様に頼まれて、私がプリンを作って冷蔵庫に入れました。でも、砂糖と塩を入れ間違えて、塩味のプリンを作ってしまった」

ミドリ：「アカにクッキーを渡したのは私です。倉庫でクッキーを食べていたのを見つけて、アカを共犯に巻き込むために押し付けました」

アオ：「冷蔵庫の中に入っていたクッキーを食べてしまったのは私です。砂糖瓶に間違えて塩を入れてしまったのも私です」

（アカ含む）全員：「すみませんでしたあああーーーーー」

咲夜さんが、土下座する4人を見渡しながら静かに溜息を吐きました。4人は怖くて顔を上げることが出来ません。

その時、レミリアお嬢様が休憩室に入ってきました。

「ムラサキ、私のおやつはどうなった？ ……げ、咲夜。どうしてここにいるのよ」

「お嬢様。実は色々ありまして……」手短にお嬢様に説明する咲夜さん。「密かにお嬢様がプリンを頼んだりするからですよ」と、軽くイヤミを付け加えるのも忘れていません。さすが咲夜さんです。

事情を聴いたレミリアお嬢様は、咲夜さんのイヤミを完全に無視して、

「そう、プリンがないんじゃないわね。買い置きチョコチップクッキーはまだ残っているでしょう。それを持ってきたさい」と咲夜さんに言いました。

「はい、わかりました」と言って、咲夜さんが退室します。

アカ：「あれ、お嬢様はチョコが苦手なのでは？」

「ん？ ああ、この前のチョコケーキの話？ あのケーキはチョコが甘すぎて口に合わなかっただけよ。もともとチョコは嫌いじゃないわ。それによく考えてみれば、紅茶にプリンは合わないものね。」レミリアお嬢様は微笑^{ほほえ}んで言いました。

「お茶会にはあなたたち4人も咲夜と一緒に参加しなさい。たまには賑やかなのもいいでしょう」

そうして、ちょっと時間は過ぎてしまいましたが、15時のお茶会が始まりました。

アオ：「……ねえ、ミドリ、もしかして私^{わたし}たち助^{たす}かったのかな？」

ミドリ：「うーん、このまま咲夜^{さくや}さんが忘^{わす}れてくれるといいよね……」

その会話を実は後ろで聞いていた咲夜^{さくや}さんの目がキラリと光ったことに、4人が気付くことはありませんでした。

ところで、レミリアお嬢様はこそっとムラサキに耳打ちしていました。

「ムラサキ、カスタードプリン、今度はうまく作ってよね」

ムラサキ：「……お嬢様^{じょうさま}、やっぱり諦^{あきら}めていなかったんですね」

こうして紅魔館の日常は、今日もつつがなく流れていくのでした。

これにてマードーミステリー「紅魔館のおかしな日常」は終了です。

さて、みなさんはこのお話をどこまで読み解けたでしょうか。事件の真相はエンディングでそれぞれが自白しましたが、それ以外にも解けていない謎があるかも知れません。この後は、それぞれの目標を明らかにしながら、わからなかったことを確認していきましょう。

短い時間ではありましたが、ここまでお楽しみいただきありがとうございました。

GMから指示があったら、12ページに進んでください。

エンディング 2 （アオが単独で最多票）

- ※ エンディングは色がついているキャラクターのセリフを担当した人が読んでください。それ以外の場所は GM が読みます。
- ※ セリフは、大体の内容が合っていれば、口調などは自由に変えていただいて構いません。

アオ：「違う、レミリアお嬢様のおやつを食べたのは私じゃありません！ 本当です。信じてください！！」

アオの叫びを聞いて、咲夜さんが「どうやら本当に違うみたいですわね……」と首を傾げました。

4 人を見渡して、静かに咲夜さんが告げます。「もう一度だけ聞きます。本当は何があったのか、ちゃんと説明しなさい。」

咲夜さんの冷たい視線に耐えられず、4 人は本当のことを白状してしまいました。

ムラサキ：「レミリアお嬢様に頼まれて、私がプリンを作って冷蔵庫に入れました。でも、砂糖と塩を入れ間違えて、塩味のプリンを作ってしまった」

アカ：「冷蔵庫のプリンを食べたのは私です。プリンの代わりに冷蔵庫にクッキーを入れました。プリンが不味くて体調を崩してしまって、しばらく休憩室で休んでいました」

ミドリ：「アカにクッキーを渡したのは私です。倉庫でクッキーを食べていたのを見つけて、アカを共犯に巻き込むために押し付けました」

アオ：「冷蔵庫の中に入っていたクッキーを食べてしまったのは私です。砂糖瓶に間違えて塩を入れてしまったのも私です」

全員：「すみませんでしたあああーーーーー」

咲夜さんが、土下座する 4 人を見渡しながらかんまりを吐きました。4 人は怖くて顔を上げることが出来ません。

その時、レミリアお嬢様が休憩室に入ってきました。

「ムラサキ、私のおやつはどうなった？ ……げ、咲夜。どうしてここにいるのよ」

「お嬢様。実は色々ありまして……」手短にお嬢様に説明する咲夜さん。「密かにお嬢様がプリンを頼んだりするからですよ」と、軽くイヤミを付け加えるのも忘れていません。さすが咲夜さんです。

事情を聞いたレミリアお嬢様は、咲夜さんのイヤミを完全に無視して、

「そう、プリンがないんじゃないわね。買い置きチョコチップクッキーはまだ残っているでしょう。それを持ってきたさい」と咲夜さんに言いました。

「はい、わかりました」と言って、咲夜さんが退室します。

アカ：「あれ、お嬢様はチョコが苦手なのでは？」

「ん？ ああ、この前のチョコケーキの話？ あのケーキはチョコが甘すぎて口に合わなかっただけよ。もともとチョコは嫌いじゃないわ。それによく考えてみれば、紅茶にプリンは合わないものね。」レミリアお嬢様は微笑んで言いました。

「お茶会にはあなたたち4人も咲夜と一緒に参加しなさい。たまには賑やかなのもいいでしょう」

そうして、ちょっと時間は過ぎてしまいましたが、15時のお茶会が始まりました。

アオ：「……ねえ、ミドリ、もしかして私たちが助かったのかな？」

ミドリ：「うーん、このまま咲夜さんが忘れてくれるといいよね……」

その会話を実は後ろで聞いていた咲夜さんの目がキラリと光ったことに、4人が気付くことはありませんでした。

ところで、レミリアお嬢様はこそっとムラサキに耳打ちしていました。

「ムラサキ、カスタードプリン、今度はうまく作ってよね」

ムラサキ：「……お嬢様、やっぱり諦めていなかったんですね」

こうして紅魔館の日常は、今日もつつがなく流れていくのでした。

これにてマードーミステリー「紅魔館のおかしな日常」は終了です。

さて、みなさんはこのお話をどこまで読み解けたでしょうか。事件の真相はエンディングでそれぞれが自白しましたが、それ以外にも解けていない謎があるかも知れません。この後は、それぞれの目標を明らかにしながら、わからなかったことを確認していきましょう。

短い時間ではありましたが、ここまでお楽しみいただきありがとうございました。

GMから指示があったら、12ページに進んでください。

エンディング 3 (ミドリが単独で最多票)

- ※ エンディングは色がついているキャラクターのセリフを担当した人が読んでください。それ以外の場所は GM が読みます。
- ※ セリフは、大体の内容が合っていれば、口調などは自由に変えていただいて構いません。

ミドリ：「違う、レミリアお嬢様のおやつを食べたのは私じゃありません！ 本当です。信じてください！！」

ミドリの叫びを聞いて、咲夜さんが「どうやら本当に違うみたいですね……」と首を傾げました。

4 人を見渡して、静かに咲夜さんが告げます。「もう一度だけ聞きます。本当は何があったのか、ちゃんと説明しなさい。」

咲夜さんの冷たい視線に耐えられず、4 人は本当のことを白状してしまいました。

ムラサキ：「レミリアお嬢様に頼まれて、私がプリンを作って冷蔵庫に入れました。でも、砂糖と塩を入れ間違えて、塩味のプリンを作ってしまった」

アカ：「冷蔵庫のプリンを食べたのは私です。プリンの代わりに冷蔵庫にクッキーを入れました。プリンが不味くて体調を崩してしまって、しばらく休憩室で休んでいました」

ミドリ：「アカにクッキーを渡したのは私です。倉庫でクッキーを食べていたのを見つけて、アカを共犯に巻き込むために押し付けました」

アオ：「冷蔵庫の中に入っていたクッキーを食べてしまったのは私です。砂糖瓶に間違えて塩を入れてしまったのも私です」

全員：「すみませんでしたあああーーーーー」

咲夜さんが、土下座する 4 人を見渡しながらかつ静かに溜息を吐きました。4 人は怖くて顔を上げることが出来ません。

その時、レミリアお嬢様が休憩室に入ってきました。

「ムラサキ、私のおやつはどうなった？ ……げ、咲夜。どうしてここにいるのよ」

「お嬢様。実は色々ありまして……」手短にお嬢様に説明する咲夜さん。「密かにお嬢様がプリンを頼んだりするからですよ」と、軽くイヤミを付け加えるのも忘れていません。さすが咲夜さんです。

事情を聞いたレミリアお嬢様は、咲夜さんのイヤミを完全に無視して、

「そう、プリンがないんじゃないわね。買い置きチョコチップクッキーはまだ残っているでしょう。それを持ってきたさい」と咲夜さんに言いました。

「はい、わかりました」と言って、咲夜さんが退室します。

アカ：「あれ、お嬢様はチョコが苦手なのでは？」

「ん？ ああ、この前のチョコケーキの話？ あのケーキはチョコが甘すぎて口に合わなかっただけよ。もともとチョコは嫌いじゃないわ。それによく考えてみれば、紅茶にプリンは合わないものね。」レミリアお嬢様は微笑んで言いました。

「お茶会にはあなたたち4人も咲夜と一緒に参加しなさい。たまには賑やかなのもいいでしょう」

そうして、ちょっと時間は過ぎてしまいましたが、15時のお茶会が始まりました。

アオ：「……ねえ、ミドリ、もしかして私たちが助かったのかな？」

ミドリ：「うーん、このまま咲夜さんが忘れてくれるといいよね……」

その会話を実は後ろで聞いていた咲夜さんの目がキラリと光ったことに、4人が気付くことはありませんでした。

ところで、レミリアお嬢様はこそっとムラサキに耳打ちしていました。

「ムラサキ、カスタードプリン、今度はうまく作ってよね」

ムラサキ：「……お嬢様、やっぱり諦めていなかったんですね」

こうして紅魔館の日常は、今日もつつがなく流れていくのでした。

これにてマードーミステリー「紅魔館のおかしな日常」は終了です。

さて、みなさんはこのお話をどこまで読み解けたでしょうか。事件の真相はエンディングでそれぞれが自白しましたが、それ以外にも解けていない謎があるかも知れません。この後は、それぞれの目標を明らかにしながら、わからなかったことを確認していきましょう。

短い時間ではありましたが、ここまでお楽しみいただきありがとうございました。

GMから指示があったら、12ページに進んでください。

エンディング 4（ムラサキが単独で最多票）

- ※ エンディングは色がついているキャラクターのセリフを担当した人が読んでください。それ以外の場所は GM が読みます。
- ※ セリフは、大体の内容が合っていれば、口調などは自由に変えていただいて構いません。

ムラサキ：「違う、レミリアお嬢様のおやつを食べたのは私じゃありません！ 本当です。信じてください！！」

ムラサキの叫びを聞いて、咲夜さんが「どうやら本当に違うみたいですね……」と首を傾げました。

4人を見渡して、静かに咲夜さんが告げます。「もう一度だけ聞きます。本当は何があったのか、ちゃんと説明しなさい。」

咲夜さんの冷たい視線に耐えられず、4人は本当のことを白状してしまいました。

ムラサキ：「レミリアお嬢様に頼まれて、私がプリンを作って冷蔵庫に入れました。でも、砂糖と塩を入れ間違えて、塩味のプリンを作ってしまった」

アカ：「冷蔵庫のプリンを食べたのは私です。プリンの代わりに冷蔵庫にクッキーを入れました。プリンが不味くて体調を崩してしまって、しばらく休憩室で休んでいました」

ミドリ：「アカにクッキーを渡したのは私です。倉庫でクッキーを食べていたのを見つけて、アカを共犯に巻き込むために押し付けました」

アオ：「冷蔵庫の中に入っていたクッキーを食べてしまったのは私です。砂糖瓶に間違えて塩を入れてしまったのも私です」

全員：「すみませんでしたあああーーーーー」

咲夜さんが、土下座する4人を見渡しながらかたまり息を吐きました。4人は怖くて顔を上げることが出来ません。

その時、レミリアお嬢様が休憩室に入ってきました。

「ムラサキ、私のおやつはどうなった？ ……げ、咲夜。どうしてここにいるのよ」

「お嬢様。実は色々ありまして……」手短にお嬢様に説明する咲夜さん。「密かにお嬢様がプリンを頼んだりするからですよ」と、軽くイヤミを付け加えるのも忘れていません。さすが咲夜さんです。

事情を聞いたレミリアお嬢様は、咲夜さんのイヤミを完全に無視して、

「そう、プリンがないんじゃないわね。買い置きチョコチップクッキーはまだ残っているでしょう。それを持ってきたさい」と咲夜さんに言いました。

「はい、わかりました」と言って、咲夜さんが退室します。

アカ：「あれ、お嬢様はチョコが苦手なのでは？」

「ん？ ああ、この前のチョコケーキの話？ あのケーキはチョコが甘すぎて口に合わなかっただけよ。もともとチョコは嫌いじゃないわ。それによく考えてみれば、紅茶にプリンは合わないものね。」レミリアお嬢様は微笑んで言いました。

「お茶会にはあなたたち4人も咲夜と一緒に参加しなさい。たまには賑やかなのもいいでしょう」

そうして、ちょっと時間は過ぎてしまいましたが、15時のお茶会が始まりました。

アオ：「……ねえ、ミドリ、もしかして私たちが助かったのかな？」

ミドリ：「うーん、このまま咲夜さんが忘れてくれるといいよね……」

その会話を実は後ろで聞いていた咲夜さんの目がキラリと光ったことに、4人が気付くことはありませんでした。

ところで、レミリアお嬢様はこそっとムラサキに耳打ちしていました。

「ムラサキ、カスタードプリン、今度はうまく作ってよね」

ムラサキ：「……お嬢様、やっぱり諦めていなかったんですね」

こうして紅魔館の日常は、今日もつつがなく流れていくのでした。

これにてマードーミステリー「紅魔館のおかしな日常」は終了です。

さて、みなさんはこのお話をどこまで読み解けたでしょうか。事件の真相はエンディングでそれぞれが自白しましたが、それ以外にも解けていない謎があるかも知れません。この後は、それぞれの目標を明らかにしながら、わからなかったことを確認していきましょう。

短い時間ではありましたが、ここまでお楽しみいただきありがとうございました。

GMから指示があったら、12ページに進んでください。

エンディング 5（単独最多票がない）

- ※ エンディングは色がついているキャラクターのセリフを担当した人が読んでください。それ以外の場所は GM が読みます。
- ※ セリフは、大体の内容が合っていれば、口調などは自由に変えていただいて構いません。

会議の結果、犯人を一人に絞れなかった4人を見て、咲夜さんが溜息を吐きました。

「つまり、犯人は誰だか分からなかったのね。それじゃあ全員、1週間おやつ抜きになるけど……。もう一度だけ聞きます。本当は何があったのか、それぞれちゃんと説明なさい。」そう言って、咲夜さんは4人を見渡しました。

咲夜さんの冷たい視線に耐えられず、4人は本当のことを白状してしまいました。

ムラサキ：「レミリアお嬢様に頼まれて、私がプリンを作って冷蔵庫に入れました。でも、砂糖と塩を入れ間違えて、塩味のプリンを作ってしまった」

アカ：「冷蔵庫のプリンを食べたのは私です。プリンの代わりに冷蔵庫にクッキーを入れました。プリンが不味くて体調を崩してしまって、しばらく休憩室で休んでいました」

ミドリ：「アカにクッキーを渡したのは私です。倉庫でクッキーを食べていたのを見つけて、アカを共犯に巻き込むために押し付けました」

アオ：「冷蔵庫の中に入っていたクッキーを食べてしまったのは私です。砂糖瓶に間違えて塩を入れてしまったのも私です」

全員：「すみませんでしたあああーーーーー」

咲夜さんが、土下座する4人を見渡しながら静かに溜息を吐きました。4人は怖くて顔を上げることが出来ません。

その時、レミリアお嬢様が休憩室に入ってきました。

「ムラサキ、私のおやつはどうなった？ ……げ、咲夜。どうしてここにいるのよ」

「お嬢様。実は色々ありまして……」手短にお嬢様に説明する咲夜さん。「密かにお嬢様がプリンを頼んだりするからですよ」と、軽くイヤミを付け加えるのも忘れていません。さすが咲夜さんです。

事情を聞いたレミリアお嬢様は、咲夜さんのイヤミを完全に無視して、

「そう、プリンがないんじゃないわね。買い置きチョコチップクッキーはまだ残っているでしょう。それを持ってきたさい」と咲夜さんに言いました。

「はい、わかりました」と言って、咲夜さんが退室します。

アカ：「あれ、お嬢様はチョコが苦手なのでは？」

「ん？ ああ、この前のチョコケーキの話？ あのケーキはチョコが甘すぎて口に合わなかっただけよ。もともとチョコは嫌いじゃないわ。それによく考えてみれば、紅茶にプリンは合わないものね。」レミリアお嬢様は微笑んで言いました。

「お茶会にはあなたたち4人も咲夜と一緒に参加しなさい。たまには賑やかなのもいいでしょう」

そうして、ちょっと時間は過ぎてしまいましたが、15時のお茶会が始まりました。

アオ：「……ねえ、ミドリ、もしかして私たちが助かったのかな？」

ミドリ：「うーん、このまま咲夜さんが忘れてくれるといいよね……」

その会話を実は後ろで聞いていた咲夜さんの目がキラリと光ったことに、4人が気付くことはありませんでした。

ところで、レミリアお嬢様はこそっとムラサキに耳打ちしていました。

「ムラサキ、カスタードプリン、今度はうまく作ってよね」

ムラサキ：「……お嬢様、やっぱり諦めていなかったんですね」

こうして紅魔館の日常は、今日もつつがなく流れていくのでした。

これにてマードーミステリー「紅魔館のおかしな日常」は終了です。

さて、みなさんはこのお話をどこまで読み解けたでしょうか。事件の真相はエンディングでそれぞれが自白しましたが、それ以外にも解けていない謎があるかも知れません。この後は、それぞれの目標を明らかにしながら、わからなかったことを確認していきましょう。

短い時間ではありましたが、ここまでお楽しみいただきありがとうございました。

GMから指示があったら、12ページに進んでください。

Ending：11

それぞれの目標

プリンを食べってしまった犯人は「アカ」です。

アカ

投票で自分が最多票にならない : 6点

他の3人が隠したがっていることを指摘する : 1点×4つ (計4点)

※ 「他の3人が隠したがっていること」とは、★マークがついている内容です。

アオ

投票で自分が最多票にならない : 5点

(クッキー)を(食べてしまった)ことを自分から白状する : 3点 ★

(砂糖と塩)を(入れ間違えた)ことを自分から白状する : 2点 ★

※ ()の部分はハンドアウトでは伏せ字になっています。

ミドリ

投票で犯人が最多票を獲得する : 8点

クッキーを食べたことを誰にも公開されない : 2点 ★

ムラサキ

投票で犯人が最多票を獲得する : 7点

作ったお菓子がプリンであることを喋らない^{しゃべ} : 2点

作ったお菓子に塩が入っていたことを誰にも公開されない : 1点 ★

追加情報

小食堂

以前、小食堂で食事をしていた時に、「レミリアお嬢様はあまりチョコが好きではないみたい」と他のメイド妖精が言っていたことを思い出した。一度チョコケーキをお出ししたら、微妙な反応だったらしい。そうだとしたら、お嬢様がチョコの入ったおやつを所望されるとはあまり思えない。

そういえば倉庫の買い置きのクッキーはチョコチップクッキーだったはずだが、なぜそんなものが常備されているのだろうか……？

厨房

ゴミ箱の中には大量の白い粉と、その下に「塩」と書かれた袋が捨てられている。また、砂糖瓶は空のようだ。誰かが砂糖瓶の中身を捨てたのだろうか……？

洗い場のシンクには洗い物が溜まっている。洗い物から、甘い香りがする。これは、バニラエッセンスの香りだろうか……？

大食堂

大食堂の床に細かいクッキーの欠片が散らばっている。クッキーはお嬢様の昼食には出ていないはずだ。誰かがここでクッキーを食べたか、クッキーを食べた後にここに来て、服に付いた欠片を落としでもしたのだろうか……？

倉庫

倉庫の備品で数が合わないものが沢山あるようだ。

砂糖や塩のような調味料の数も合わないし、クッキーなどの買い置きのお菓子の数も合わない。ミドリはちゃんと管理しているのだろうか……？

休憩室

アカ・アオ・ミドリの荷物に触った形跡がある。この3人が一度休憩室に戻ってきていたのは間違いないようだ。

そういえば、さっき見たアオの口元が汚れていた気がする。13時の時点ではそんなことはなかったはずだ。仕事中に何か食べたのだろうか……？